

「春の四旬節に誘われて」

主任司祭 吉池 好高

いつもの年より遅い四旬節のおかげで、今年はすっかり春めいた陽気の中で四旬節を迎えることが出来ました。早朝の散歩の折など、家々の庭の梅の木の下で足を止め、思わず深呼吸したりしています。

「時は満ち、神の国は近づいた。回心して福音を信じなさい。」マルコ福音書のイエスの最初のみことばが、心地よく胸に浸みます。新共同訳の聖書を見ると、「回心して」ではなく「悔い改めて」と記されています。悔い改めるべきことは山ほどありますが、春を告げる梅の香に包まれると、悔い改めるべき数々のことどこかに解け去ってゆくように思えてきます。四旬節の厳粛な雰囲気の中では、「悔い改めるべきこと」が重くのしかかって来るように思えますが、私たちの「悔い改めるべきこと」など、梅の香に包まれれば、どこかに解け去ってゆくもののようにも感じられます。悔い改めようとあせる心を忘れて、立ち止まって、「この時」を告げている梅の古木を見上げる「回心」のほうが、本来の四旬節の心に近いのではなどと思えてきます。

「回心」とは立ち返ることだと言われます。悔い改めるべき、山ほどの数々のことを迂回して、私たちが立ち戻るべき先は福音をおいて他にはありません。先のばしにしていた不用品の整理に取り掛かるときのような重い心をもって「悔い改め」の作業に取り掛かるのではなく、今年の四旬節は、梅の香に誘われて、思わず足を止めるように、私たちに誘う「回心」を味わいたいと思います。一段と寒さ厳しかった今年の冬を越して、見上げる梅の花は私たちにほっとさせてくれます。私たちが受け入れた「福音」は、私たちの「悔い改めるべきこと」がどこから手をつけてよいか分からないほど山ほどあっても、私たちが信じる、私たちの救い主イエス・キリストによってゆるされていることを知らせる福音です。捨てるべき不用品の整理の手を思わず止めさせるほどの、喜びに満ちた、春の香りの訪れです。その香のもとを追って行くゆとりが私たちにあるなら、堂々とした梅の古木に行き着くでしょう。イエスの十字架です。